

一つの宗教しか知らない者は宗教を一つも知らない

私たちは「宗教」という語をどのように捉えているだろうか。「〇〇教」のように教団を指す場合もあれば、個人の信仰信念や文化的価値観を指す場合もある。今日、日本人の多くが宗教と呼ばれるものをほとんど分かっていない状況で、宗教に対するイメージを抱いている。その背景には、戦後日本における学校教育がある。第2次世界大戦から約80年経とうとしているが、日本人のほとんどが、宗教——この語がどのように捉えられるかということも含めて——を学ぶ機会はなかった。また、新聞やテレビなどのマスメディアが、宗教に関する報道を抑制してきたことの責任も重い。いわば、日本人は“宗教を知らない”のである。

グローバルな状況において、宗教指導者には「宗教」という語との対比のなかで、自らが信じる教えについて語る力が求められている。一方で、そうした説明を行うことができる者がどれくらいいるだろうか。宗教学の祖として知られるマックス・ミュラー (F. Max Müller, 1923-1900) は、「一つの宗教しか知らない者は宗教を一つも知らない」という趣旨で宗教学の意義について述べた。この言葉は、ゲーテの「一つの言語しか知らない人は、どの言語も知らない」に由来する。一つの言語しか知らない者は、「言語とは何か」、「言葉とは何か」という問いに答えることはできない。グローバルな視点に立って、世界の言語を見渡してみればはじめて、言語や言葉について説明することが可能となる。これは宗教や神学についても同じことが言えよう。

自分の信じる宗教の視点から、世界を見ることは確かに重要である。しかしながら、私たちの周囲には異なった宗教の教えや価値観をもつ人々が暮らしている。彼らのことを学ぶことははじめて、私たちは自分の宗教を知ることが可能となる。ミュラーは、「一つしか知らない者は、一つも知らない」(He who knows one, knows none.) という言葉が宗教にも当てはまると述べる<sup>(1)</sup>。宗教者、とりわけ宗教指導者は、グローバルな視点に立って自分の信じる教えをより深く学ぶ必要がある。1949年、中山正善2代真柱が新制天理大学に宗教学科を開設したのは、将来、教会長をはじめとした天理教の指導者層に当たる人々が、他宗教の理解を通して天理教を深く学ぶためであった。

### 「宗教の世界史」

「世界神学」を構想したW・C・スミスは、宗教現象の動態<sup>ダイナミクス</sup>を表現するために「伝統」という語を用いた。「宗教」という語について、彼は複数形の「レリジョンズ」(religions)ではなく単数形の「レリジョン」(religion)を用いた。「宗教」を単数形で用いるという点に、スミスの宗教論の特徴が現れていると言える。

スミスは「宗教学」という語を“History of Religion”と単数形で表現した。「宗教団体は複数あるし、宗教と呼べるものは数限りなくあるはずなのに」と考える読者もいるかもしれない。『世界神学をめざして』の第1章は、「単数形の宗教学」(A History of Religion in Singular)としている。スミスは、宗教が現

在を生きる人々によって絶えず変化している現象と捉えていたため、伝統として新たに積み重なっていることを指摘した。それゆえ、今を生きる私たちの活動は、これまで積み重なってきた「人類の宗教史」の一つの歴史として新たに積み重ねられるものである。

問題は、すべての宗教は同じであるということではない。一つの宗教ですら、世紀ごとに、あるいは国ごとに、あるいは村や町ごとに異なることを歴史家は承知している。その程度があまりに大きいため、私は具体的名称としての「宗教」(‘religion’)の語や、また「ヒンドゥー教」「キリスト教」などの用語の使用を止めるまでにいたっている。というのは、それらの名称に一貫して対応するようなものは、地上にも、あるいは天上にも何ら見出されないからである<sup>(2)</sup>。

同じ宗教の教えであっても、地域や言語が変われば考え方は異なる。時代が異なれば変化していくのは当然であろう。スミスは宗教を単数形で用いることで、すべての宗教は同一であることを主張したわけではない。私たち一人ひとり意識するとせざるにかかわらず、「宗教の世界史に参与してきた」<sup>(3)</sup>。言い換えれば、時間的、空間的、言語的に制約を受ける人間が生きた伝統は、単数形で表現される宗教の世界史へ回収されていく。

大航海時代以降、今日に至るまで、各宗教の教えはグローバルに移動し展開してきた。人々の移動は交通機関の発達によって、情報の流通もインターネットの普及によって目まぐるしい。宗教現象は社会に暮らす人々が互いに影響し合いながら形成され、変化していることを踏まえるとき、完全に独立して存在することは極めて困難になってきている。地球に暮らす人間共同体は、「宗教」(レリジョン)と呼ばれる現象を共に作り出している。このスミスの考えは、宗教教団がグローバルに展開していくうえでの示唆を与えているように思われる。

### 【註】

- (1) マックス・ミュラー (塚田貫康訳) 『宗教学入門』晃洋書房、1990年、12頁。
- (2) ウィルフレッド・キャントウェル・スミス (中村廣治郎訳) 『世界神学をめざして—信仰と宗教学の対話—』明石書店、2020年、11頁。
- (3) 同上、35頁。

### 【訂正】

- 2024年11月号左段で以下の点に誤りがありました。
- (誤) 研究所を創設したりと、「宗教」をめぐる学問的状況の中心にいた人物である。1984年には
  - (正) 研究所長を務めたりと、「宗教」をめぐる学問的状況の中心にいた人物である。1986年には